

Ⅲ 書評

亀井浩明 著

『教師の見識—変革期に求められる教師の資質・能力—』

— 学事出版、2018年 —

高崎健康福祉大学 栗原 幸正

1. 本書の問題意識

本書の著者は、昭和5年に群馬に生まれ、昭和28年に新制大学を卒業してから現在まで67年間、教育界の第一線で活躍しておられる。その足跡は、まさに昭和から平成に渡る激動の教育の中にあり、日本の戦後教育の生き証人と言っても過言ではない。その著者が、昭和・平成という、日本の教育の大変革の経験の上に、令和という次世代の教育を見据えて出版した本書の意味は、非常に大きい事は言うまでもないであろう。では、本書における問題意識とは何なのであろうか。

本書の1章冒頭において、著者は教師の専門性について論じることから本書を始めており、本書全体のテーマである、今後の日本の教育はどうあるべきかについての論議の中核にあるのは教師であることを、明確に位置づけている。そのことにより、本書が、教師の資質・能力について論じることを通して、これからの教育はどうあるべきかを、これまでの著者の教師や教育行政・教育研究者としての経験を元に論じていこうとしている事を読み取ることができる。特に重要な点は、本書の中では「教員」という言葉はほとんど使用されていない。それは、著者が、教育を実践するものは「教員」ではなく、より崇高な教育的理想と卓越した教育技術を備えた、人間的にも完成された「教師」によってなされるべきだという強い思いを持っている表れであろう。

「はじめに」で、著者は戦後の教育について、なかなか優れていたのではないかと私見を述べている。それは戦後の教育が、児童生徒の人間重視の教育観を共有した、日本の教師たちによって形作られ、継続した教育活動の賜であるという著者自身の経験から生み出された事実であると捉えることができるだろう。しかし、社会環境の変容に伴い、教師を取り巻く環境は劇変し、これまで積み上げられてきた教育観にブレが始めている事に著者は危機感を強く感じている。そのような時代の中で、教員ではなく教師としてどのように学校教育に臨んでいくべきか、どのような教師を目指して自らを高めていくか。その羅針盤を次の世代にどのように示していけばよいのか。それが著者が本書を通して読者に伝えたい大きな問いであると考えている。

2. 本書の構成と、各章の概要

本書の構成と、各章の概要は次の通りである。本来ならば章・節までの記述を行うが、本書の内容が多岐にわたっているため、節の内容も含めて記述する。

第1章 学校経営における教師

第1節 新しい教師の専門性

1. 教職は専門職／2. 教育をめぐる環境の変化／3. 21世紀の教師の専門性

第2節 日本の教師の人間重視

1. 日本独特の人間重視の教育論／2. 戦後の教師養成／3. 専門家教師の学び

第3節 学校経営への参画

1. 学校経営の発想／2. 有効な組織編成／3. すべての教員の学校経営への積極的参画の必要性／4. 校長の指導／5. 副校長・教頭の役割／6. 主幹・主任・指導教諭等のミドルリーダーへの期待／7. 多様な人材活用

第2章 学習指導における教師

第1節 学習とは何か

1. 学ぶ意味／2. 学習についての理論的対立／3. 授業では融合が求められる

第2節 単元構想と授業研究

1. 単元展開の一例／2. 授業研究

第3節 個別指導

1. 個別指導としての対話の大切さ／2. 学習についての対話の具体的な姿／3. 進路について／4. 家庭での学びについての対話／5. 読書を勧める／6. 心の健康を推進する／7. 教師の語りにおける配慮事項

第3章 生活・心の指導における教師

第1節 生活・心の変化

1. 最近の青少年の印象／2. 青少年に見られる好ましくない心の変化

第2節 実態の背景

1. ICTを活用する時間が極めて長い／2. 塾・お稽古ごとへ行く場合が多い／3. 自然の魅力や芸術の美との交流が乏しい／4. 読書をあまりしない／5. 友人と語り合わない／6. 家庭生活の変化

第3節 学級での教師の語り

1. 学級での教師の語りの印象深さ

第4章 現代の課題対応における教師

第1節 道徳教育の意義

1. 哲学することの大切さ／2. 新学習指導要領の理念を重視／3. 教師の工夫・配

慮／4. 葛藤克服の討論／5. リフレクションの大切さ／6. 教師の語りに必要な慎重さ／7. 嫉妬が原因／8. 評価／9. 嫉妬を超克する生き方／10. 道徳と感性

第2節 対話が今こそ最も大事

1. 対話の現代的意義と学校教育／2. 私が対話に着目したきっかけ／3. 対話での教師の基本的姿勢／4. 心理学の勉強の必要性／5. 哲学も重要

第3節 教師のモチベーション

1. 現状と課題／2. モチベーションがないといわれるが／3. 校長・副校長・教頭の役割／4. 校内研修の充実を図る／5. 望ましい意見交換の場／6. 職員会議を真に意味あるものにする配慮／7. 配慮事項

第4節 情報化社会の人間教育

1. 情報化社会で人が学ぶとは／2. 教師の指導／3. メディア・リテラシー教育の推進／4. 学習におけるメディア活用の利点／5. マルチメディア普及にかかわる課題

第1章第1節で、著者は教育という活動を「この世で最も複雑な活動」と位置づけた上で、教育を巡る環境やニーズが大きく変化してきたゆえ、教師はより複雑になった教育環境に対抗しうる専門性を有する必要が出てきていると論をスタートしている。国際化や情報化をはじめ児童生徒の内面的変化にどう対応していくのか。またチーム学校の動きの中で教師一人一人の専門性をどのように確立していくのか。対応するために教師が身につけていかねばならない11に及ぶ見識が、著者の教師への熱い期待と共に記述されている。11の見識は大きく分けると教師としての哲学を基盤とした見識、教育内容や方法に係る見識、学校経営に参画する見識、そして現代的な課題に対応する見識の4つに大別され、それらの内容については章や節を改めて詳しく論じている。

第2節においては、師範学校における、児童生徒の自発性・人間性重視を基盤とする教育観の育成が継続しなかった点に課題性を持たせながら、現代の教師の専門性の育成に必要な研修の在り方や習得すべき哲学や学問について概略を論じ、教師にとっての研修や研究の意義を読者に問うている。そして、研修や研究を行う教師がその成果を発揮する場として著者が位置づけるのが第3節で記述される「学校経営」への積極的な参画という方向性である。ここでは、学校経営にどのように教師たちが関わるべきかを、校長・副校長・教頭・ミドルリーダー等の役職によって示し、教師の研鑽の成果をどのように学校という組織で発揮していくべきかの道筋をしめし、さらには学校がどう経営されるべきかを論じている。

第2章では、教師としてどのように児童生徒の「学び」と対峙していくべきかを、「体系的な知識」の習得と「各自の独自の知」という対立する理論をあげ、それらの融合を思考していく手立てとして「スキーマ」という概念を著者は重視する。「スキーマ」は個人それぞれに構築された知の枠組みという位置づけと捉え、その「スキーマ」に両論を編み込んでいく作業が重要としている。

それを可能とするため必要不可欠な事が、教師による丁寧な教材研究を基盤とした単元構想である。第2節においては、単元構想をする際、導入・展開・まとめのそれぞれの過程で、教師はどのように単元を構想していくべきか、著者の積み上げてきた経験を元に、具体的に示されている。それはまるで、新採用教員に寄り添う指導教員が、授業づくりに対して何が必要かを丁寧に指導していると感じるまでの記述である。そして、2節の取り組みを経て具現化された授業を、「授業研究」を通してどのようにアセスメントし、教師を育て、明日の授業の向上を図っていくかの方法論が、丁寧に語られている。校長はどのように授業研究に関わっていくべきか、また、教師は授業研究で何をどのように発言すればよいのかの具体的内容は、示唆に富んでいる。

さらに著者は、前述の「スキーマ」の再構築のためには、授業に加えて児童生徒一人一人と教師との対話が重要であり、その方法について「学習」「進路」「家庭」「読書」「心の健康」という5つの領域からの対話の在り方について示している。それは著者が現職の教師であったとき、実際に生徒との間でなされた対話が元になっており、非常にリアリティのある迫力ある内容として読者に迫ってくるであろう。そして最後に著者自身の経験からの対話する際の配慮事項には、著者が本書に寄せた児童生徒の自発性・人間性重視という姿勢をしっかりと受け取ることができる。

第3章では、近年の児童生徒を含む青少年全体の生活や心の変化への危惧から論は出発する。それは、「友人関係の希薄化」「周囲への感性の低下」「自己中心的傾向」「自己否定感」「孤立・無関心」「将来への不安」「規範意識の低下」「教師への不信」「儀礼的關係性」の9つの傾向であり、その一つ一つに著者の児童生徒に寄り添った危機感が述べられている。著者はあえて「好ましくない傾向」と柔らかく記述しているが、これらの青少年の示す傾向について、高い危機意識を持っていることが文章から汲み取る事ができる。次に、その傾向はどこから生まれるのかについて論述したのが第2節である。第2節では著者はその要因を、過剰なICT利用、塾等への影響、自然・芸術との乖離、読書離れ、友人・家族との希薄な関係性にあるとし、それぞれについて私見を丁寧に述べている。

第3節では、それらの青少年を取り巻く危機感にどのように学校は対応していくべきかについて論じている。著者は青少年を取り巻く危機感に対応する取り組みとして、「対話」「道徳教育」「教師の語り」の重要性を提言しているが、第3節においては「教師の語り」について焦点化する。ここでは、「語り」という表現を通して、教師が児童生徒に教師として声に出して伝えていかねばならないこと、また、その伝え方について述べている。特に「いじめ」の問題については、本書の基盤となっている児童生徒の自発性・人間尊重の教育観を大切にし、学校がユートピアでなくてはならないという論を展開し、それに向けた教師の取り組みを具体的に記述している。それは、現在大きな教育課題となっている、学校における「いじめ」への決別を願う著者の強い思いに他ならない。

第4章では、現代的教育課題に対応するために教師は何をどのようにしていくべきかが論じられている。第1節では、「道徳教育」の必要性について、哲学することの大切さを強く打ち出し、

その妥当性を示している。そして、価値ある「道徳教育」を実践するための具体的方策を、著者のこれまでの経験に即して具体的に記述しており、そこには著者自身の生き方が記述の中にきれいに染め込んであるという内容である。第2節においては第1節の取り組みをより効果的にするために、やはり「対話」が重要であると論じている。「対話」については第2章でも述べられているが、第2章では教育的な指導を内包した「対話」であるのに対し、本節では哲学的・認知心理学的な「対話」の重要性を説いている。教師としての「対話」に加え、人間としての「対話」も教師としては求められていることを強く示していると言えよう。

第3節では論をあらため、教師のモチベーションを維持・向上するために何が必要であるかを、学校経営的視点で論じている。校長・副校長・教頭は具体的に何をすべきか、校内研修をどのように運営すべきか、また、学校における会議をどのように改革すべきかについて、配慮する事項にも気を配りつつ記述しており、学校教育目標の一つに教師のモチベーションの向上が位置づけられている学校にとっては、具体的取り組みの仕様書とも言える内容となっている。そして、第4節では、これからますます重要となるメディア・リテラシーの充実を入口としながら、本書全体で著者が十分触れられることができなかったと考えられる、「感性」や「共感」の育成の必要性を記述し、最後に「ぎりぎりの教師のわれの義務として机に眠る生徒を揺する」という「詩」に著者の教育への想いを込めて本書のまとめとしている。

3. 特筆すべき記述へのコメント

(1) 教師への絶対的信頼

日本の各地で教員の不祥事等が報道され、教員の資質の向上が大きな課題としてメディアを賑わし、免許更新制度や年次研修制度が整備された事は記憶に新しい。しかしそのことで教員の資質ははたして向上したのであろうか。現在でも教員による不祥事は絶えることがないばかりか、管理職にならない教員の存在や、教員になろうとしない多くの教職課程履修生の存在が、働き方改革の影響もあり、大きくクローズアップされている。その様な報道は、静かにそして確実に日本の教員たちへの信頼感を低下させ、ひとたび学校で子ども同士のトラブルが発生すれば、どのような家庭課題等の別要因が内在したとしても、トラブル発生のはたらきは教員に向けられ、多くの意識の高い教員の心が折れることを促進してしまうのである。

このような教員不信の流れの中にあって、本書全体を通じて貫かれているのは「教師」という存在への絶大な信頼と大きな期待である。このことは、日本の教育に係る者たちにどれだけ勇気とやる気を与えるのだろうか。これまで、日本の教育はなかなかうまくいっていたと述べることで自身が忌避されてきた感が強い中で、多くの教師たちの研鑽と葛藤により日本の教育のレベルが保たれてきたと位置づける著者の力強さに、敬意を表さずにはいられないだろう。昭和から平成で失われた教師への畏敬の念の喪失について、大きな歯止めの杭を打ち込んだのが本書である。

しかしながら本書では、著者は「教員」という言説をあえて使わず、「教師」とあえて記述し、

現在教育を営む者たち全員への警鐘も同時に忘れてはならない。信頼されるべき教師となるためには、急激に変化する社会に応じて自らを高めていく教師像が不可欠であると、日本の教育界に訴えていると言えよう。教師として、学校教育に関わる者たちはどうあるべきかを真剣に人々に問うているのである。そして教師によって教育の再構築は可能である事を提言していると言えよう。

(2) 経験に裏打ちされた方策

各章で示された「教師」が取り組むべき具体的な手立てについては、著者のこれまでの経験を元に、大変丁寧に記述がなされている。例えば第2章第3節における児童生徒への個別指導に不可欠な対話の在り方についての記述では、現職の教師が生徒指導の在り方を新採用教員に指導している場面に立ち会っているような記述がなされている。同様の記述は各節に多様に組み込まれており、ともすると老婆心的な記述と受け取りがちであるが、そこには経験からの叡智が組み込まれており、納得せざるを得ない説得力が感じられるのである。これは著者自身が、教師として実際に教育現場にいた証であり、その一つ一つの項目について、改めて考えていく必要を読み手に訴えていると言えよう。そして、読み手には、現職の頃の、児童生徒に問いかける著者の姿が目には浮かんでくるのである。

(3) 教師を生かすカリキュラム・マネジメント

第4章第3節に「教師のモチベーション」という記述がある。この記述はまさに評者が校長として現職だった時に、工夫を重ねて具現化したカリキュラム・マネジメントそのものが記述しており、大いに驚かされた。著者はカリキュラム・マネジメントという言葉はこの節では一切使用していないが、現状におけるカリキュラム・マネジメントの究極の目標は、教師のモチベーションの向上に他ならない。その点を著者は鋭く見抜き、管理職が積極的に教師たちを含む学校の職員に関わり対話し、所与のものとして受け入れられている会議の在り方や校内研修を教師のモチベーションの向上を軸に改革することを通して、学校に関わる全ての職員が自律性と同僚性に満ちた、いわば民主主義に則った学校経営を具現化することが必要であると述べている。

現在多くの学校でカリキュラム・マネジメントを行うことが強く求められ、教育委員会や学校長はその具現化に向けてしのぎを削っている。中には、学校のランドデザインを教職員全体で作成する事だけが目的化されたり、学校長のリーダーシップを発揮する場として次々とトップダウンの取り組みを教職員に課していく事例があとをたたない。その結果として、教師たちの仕事量は増え、教育という業務へのやりがいさがれ、ひいてはメンタル面で疲弊する教師を生み出す危険性さえも孕んでいるのである。著者は、その傾向に対し、カリキュラム・マネジメントをどう行っていくのが妥当性があるのかについて具体的に示しているのである。

著者は、教育の未来に対し大きな期待を寄せている。その実現に向けて、教師を生かすための学校改革としてのカリキュラム・マネジメントの果たす責任は重い。

(4) スキーマという概念

著者は本書において、学びについて論じる際に「スキーマ」という概念を度々登場させている。

本書では、人が個々に有している知や思考の枠組みを「スキーマ」と位置づけており、その「スキーマ」刷新、つまり知や思考の組み替えが、学びであり、教師が重視しなければならない概念であると述べられている。

ところが、「スキーマ」という言葉は、哲学や認知心理学をはじめコンピュータの世界で、現在では様々な分野で使用されており、その定義は分野によって微妙に異なっている。応用化学等の世界などでは、学生が行う実験の全体構造図を「スキーマ」と呼び学生に作成させたりするという。そのような多岐にわたる解釈が存在する「スキーマ」という概念について、紙面の都合があるとしても、より明確に定義づける必要があったのではないだろうか。特に、本書を読むであろう教師たちにとってはあまり馴染みのない言葉で有り、読み手のそれぞれの受け取り方により、「スキーマ」の概念が一人歩きを始める可能性も否定できない。しかし、それをあえて承知で、教師たちが自ら考えることの必要性を提示しているとすれば、考察で述べるように本書の意義をより鮮烈に印象づける概念と言えるであろう。

4. 考察

著者は、戦後の教育が、教師間に共有された人間性重視の教育観に支えられ、昭和・平成と紆余曲折はあったもののほぼ良好に推移してきたと把握している。そして平成が幕を閉じ、令和の世が始まると同時に行われる教育の大改革を前にして、これまでの教育に携わったものとして、理論的・学問的な視点に加え、現実的・経験的な視点での検討が不可欠であると主張するのである。

では、現実的・経験的視点とはいったいどのようなものであるのだろうか。これからの教育を担う教師や学校職員に、どのような視点をもって教育に携わって行けばよいのか。その方向性を著者の経験に基づく記述の中に織り込み、読者に伝えていこうとする方向性こそが、本書の本当の意義だと感じられた。以下に本書の意義について3点にまとめてみたい。

(1) 本書の意義① 「教育を哲学すること」

本書の題名や、目次を最初に目にしたとき、教職に長年にわたって従事してきた著者から、これからの教育を創る若手の教師たちへのメッセージが述べられていると誰もが感じるに違いない。しかしながら実際に読み進めると、そこに述べられているのは著者自身が経験を通して得た、教育という営みの姿で有り、教育の総体である事に気づかされるであろう。そして、教育として、教師として、あるべき方向性が具体的に示されているが、その一つ一つについてなぜそうしなくてはならないのか、そうするためにはどのような手立てが必要か等についての詳しい論述がなされていないものが多い。フルコースの食事の前菜だけを食べさせられて、メインディッシュが出てきていないという印象である。そのため、本書の構成で示したように取り扱う教育内容は非常に広範となっている。

パナソニックの創始者である松下幸之助は、どのような質問に対しても「考えなはれ」と答え

るのが常であったという。本書を読んだ者は著者に対して尋ねたいことが次々と湧き上がってくるに違いない。おそらくその答えは、「教育を哲学しなはれ」ではないのだろうか。著者が本書を通じて教育という営みの広大さを示し、その一つ一つについて意味や関係性を深く考えていく必要性を示した事は、現在の急激な教育改革の中に有り、非常に重要な視点である。

(2) 本書の意義② 「教師への絶対信頼」

教育書の多くは、教育活動に対しての課題を分析してその後の方向性を論じる傾向を持っている。教師に係る文献も多くは、教師という存在の現状批判から始まり、理想の教師像を提示するものが多い。しかし、読む側の教師にとっては自己否定から始まる文脈に寄り添うことは勇気があることであり、自然と教師の本離れが進行したのにもうなずけるものがある。

しかしながら本書は一貫して教師という存在にプライドを持たせ、教師の深い研鑽の先に見える、新たな教育への期待を感じさせてくれている。そこには、教師でしか本当の教育を理解する事はできないし、また新たな教育を切り開いていくのも教師の力によることでしか成就しないという、教師という存在への絶対的信頼が横たわっている。その信頼される教師たちが、今やらなくてはならないことが、本書の中に詰め込まれていると言えよう。

(3) 本書の意義③ 「当たり前のこと」

本書を最初に通読して感じたことは、教職に就いてきたものにとっては、教育活動に係る「当たり前のこと」が網羅的に列記されており、教育改革に臨むための新たな理論や方法が示されているわけではないということであった。児童生徒に対する対話や、道徳の指導、授業研究等について、日々の教育活動の中で日常的に教師は取り組んでいることであり、どの教師も既に習得し、実践している内容と読み取れるからである。しかし、本書の特徴として「当たり前のこと」を示した文脈ほど、著者の経験を詳細に列記してある。そこで初めて「当たり前のこと」が本当にできているのかどうかを、読み手自身が自ら問う必要性に気づかされる。

アクティブ・ラーニング、カリキュラム・マネジメント、プログラミング学習など、カタカナで示された教育改革の流れの中にある教師たちに、教育における「当たり前のこと」、つまり不易な教師による教育活動の重要性を、改めて気づかせてくれるのである。

5. おわりに

著者は、本書の中で教育改革に対峙する教師たちへ、本書を通じてエールを送り続けることを目指しており、教育改革の方向性については強く論じるのをあえて控えているように感じた。しかし、日本の教育の在り方についてのみ、国家のための教育に陥ることなく、人間重視の教育を貫いていく必要性を「富士山全体を高く大きく」という比喻を用いて強く主張している。本書を手にした教師たちが、教育改革する事のみを目標とせず、「当たり前のこと」の精度を高めるべく研鑽を積み上げ、日本の教育という富士山を大きく・高くしていくことを著者と共に見つめ続けて行きたいと思う。